

集学的治療で良好な経過が得られた直腸癌再発の 1 例

社会医療法人共愛会 戸畑共立病院 臨床工学科 川崎玲

共同演者

臨床工学科 大田真、垣下ひかる、樋口優子

放射線科 森岡文明、靱田義士、成定宏之、今田肇

症例は 40 代男性。2006 年直腸癌 stage II b と診断され手術を施行。2009 年、再発病変増大傾向あり、当院を受診し治療を開始した。ハイパーサーミアは直腸に対し 33 回施行、平均出力は 521W、腹臥位で 50 分施行。併用して放射線治療を 70Gy、化学療法（CPT-11）を 3 コース、高気圧酸素治療を施行し、その後の肺転移においては単発性であった為、手術施行。2012 年 10 月、転移性肝腫瘍が出現。ハイパーサーミアは肝臓へ変更し計 28 回、平均出力 491W、腹臥位で 50 分施行。化学療法は XELOX を 1 コース行うも、CEA の上昇みられ PD であった為、Cmab-XELOX へと変更し、その後 CEA は正常値まで低下し、転移性肝腫瘍も経時的に縮小した。直腸癌術後再発や転移性肝腫瘍に対して、温熱化学療法、放射線治療、高気圧酸素療法を併用した集学的治療を施行することにより、再発・転移病変を長期にわたってコントロールすることが可能であった。また、発症より 8 年以上経過しているが、現在も治療継続中であり、長期生存が得られている。